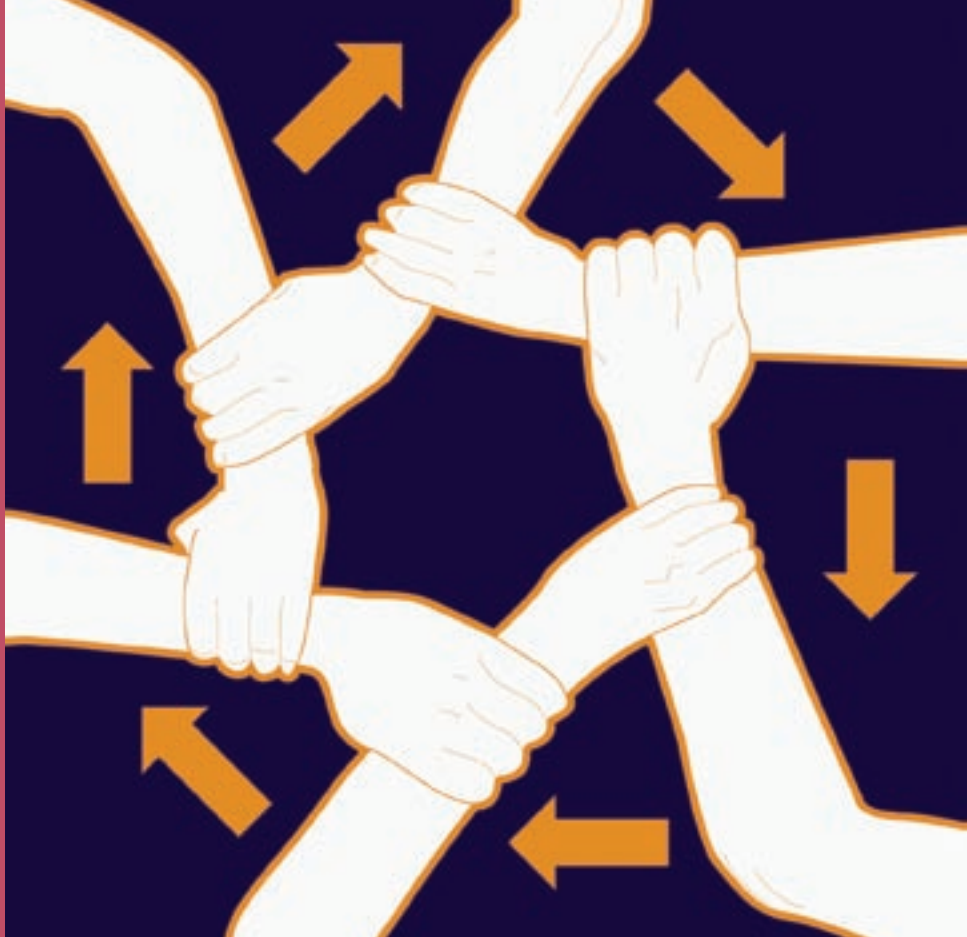


「百科事典」 革命

Reference revolution



news050314-17/18 March 2005
Roxanne Khamsi

2001年1月、ウェブのパワーに刺激を受けた Jimmy Wales は、仲間とともにオンライン百科事典「ウィキペディア」を立ち上げた。ウィキペディアとは、数多くの人々のコラボレーションによって多言語のリファレンスツール（事典）を作り上げるというプロジェクトである。ウィキ技術という自分のウェブサイト以外の特定のサイトをユーザーが自由に修正するための技術を利用して、ウィキペディアの特定のページを修正したり、まったく新しいページを加えたりしていく。news@nature.com の記者 Roxanne Khamsi が、サンディエゴ（米国カリフォルニア州）で開催されたオレイリー社の Emerging Technology 会議に出席していた Wales にインタビューした。

——リファレンスツールを公開して自由に編集してもらおうという考え方は比較的新しいコンセプトですよ。ウィキペディアを始めようと思った動機とは何だったのですか。当初のコンセプトは、地球上の誰もが自分の言語で自由に使えるような百科事典でした。世界を変えたい、そして誰もが基本情報にアクセスできるようにしたいと思っていました。これはもちろん先進国でも大切なことですが、そうでない多くの地域に暮らす人々にとって、

ほんとに大切なことだと思うのです。

これはとても大きなビジョンで、膨大な作業が必要になります。だからこそ、たくさんの人に助けをもらう必要があったわけです。私はウィキペディアの前にヌーペディアを創設していました。でも、ヌーペディアにはとても複雑な査読制度があったし、学術的なトップダウン式の仕組みでしか機能しませんでした。ボランティアではうまくいかなかった。結局、厳しく管理された融通が利かないこの仕組みはうまくいきません

でした。その後、ウィキというすごい方式に出会いました。ウィキペディアは立ち上げ直後から大当たりし、最初の2週間でそれまでの2年分を上回る成果があがったのです。

——ウェブには他にもいろいろな可能性があるのに、百科事典をやるべきだと思ったのはなぜですか。

いくつかのきっかけがあります。リナックスやアパッチといったフリーソフトをはじめ、ウェブ上で展開されて成長し

ていくさまざまな様子を目の当たりにしてきました。それらがうまくいくのを見て、ほかに人々が力を合わせてできるものがあるのではないかと思った。このような風土がプログラミングの世界で始まったのは当然のことでした。そして、すでにあるもの以外では他にどういったものがうまくいくだろうかと考えたわけです。

百科事典に載っている記事にはいろいろ良いところがありますが、たとえばこんなことです。もし私が大勢の人々に「ロンドン市長に関する記事」を書いてほしいと言え、その内容をどんなものにすべきかみんな大体わかるわけです。現職のロンドン市長についての情報とか、過去のロンドン市長をめぐる歴史といったこと。「サンディエゴに関する記事」となれば、人口、気候、歴史など。つまり、誰もがその記事の内容がどんなものになるべきか明確な考えを持っているので、共同作業が簡単にできるのです。

——ウィキペディアのようなフレキシブルなリファレンスツールが既存の「固定的な」情報源を追い抜くとお考えですか。

間違いなく追い抜きます。ただ、その程度は分野によって異なると思いますよ。たとえば、ウィキによるオープンな編集モデルは、査読制度のある科学研究の分野で取って代わることはできないと私は考えています。本当にオープンなモデルでは、専門家による必要とされる質の管理ができないのです。

ウィキペディアには原著研究論文を掲載しないというポリシーが初期にできあがったのですが、これは独自の见解を持つ物理学研究者などに対応するためのものでした。たとえば、磁気に関する新しい学説をウィキペディアに載せたいと考える人々がいるとします。でも、すでに知られていることを書き集めるのが一般百科事典の役割で、原著研究論文の掲載は百科事典にはふさわしくありません。

——素人と専門家で意見が違ふことはありますが、科学の世界では専門家どうして意見が対立することもありますか。この場合にはどのように対処していますか。

このような時のために、中立的な観点に基づいて記述するというポリシーがあります。細かくて詳しいポリシーですが、ようするに、真っ当な論争のある論点であればウィキペディアは1つの特定の考え方に肩入れしないということです。こういった論争があります、という事実を報告するだけなのです。

たとえば気候変動に関する記事を書くことは可能ですが、ウィキペディアは、特定の1つの学説を支持するようなことはしません。基本的にはデータと情報を報告するだけです。2つの独立した記事を掲載することも多いです。「気候変動をめぐる論争」という記事を載せ、政治的色彩のとても濃い議論について説明する。そしてそれとは別に、純粋に科学的な記事を掲載するのです。もちろん、そういった場合でも正当な反対意見についての説明を加えます。少数意見にもきちんと触れる必要があるのです。

——最近、ウィキスピーシーズという新たなツールを立ち上げられましたよね。ウィキペディアからウィキスピーシーズを独立させることにそんなに熱心だったのはなぜですか。

ウィキペディアにはサメに関する記事があり、映画「ジョーズ」、サメの攻撃、文化などについての説明があります。一般百科事典の記事だから、それはそれでよいのです。でもウィキスピーシーズは、生物学研究者向けの生物種に関する百科事典のほずですから、系統的に編成され、科学情報だけが掲載されていなければならないのです。ウィキスピーシーズはウィキペディアと重複している部分があるために議論が起こっていたわけですが、それぞれ別のタイプの百科事典です。

それに名前をついた生物種の数は180万にものぼります。ウィキペディ

アには「この生物種は〇〇属。以上」という情報だけの記事が180万点もあるといった事態にしたくないのです。そういった情報にはウィキスピーシーズの方が適しています。ウィキスピーシーズがまずデータを放り込む場所になる。そしてデータを積み上げていくのです。

——「群衆の知恵」という考え方があります。これとウィキペディアが作り上げられていく仕組みには類似点があるとお考えですか。

100万人がそれぞれ1文ずつ書き足して行って、大規模な大量処理プロセスを経て1つの百科事典がどうにか作り出されている、と考えている人々が大勢いると思います。でも、ウィキペディアのコミュニティではそのようには考えていません。むしろ昔ながらのやり方で行われているというのが実情です。つまり、お互いをよく知っている人々がグループを作って、連絡を取り合っている。さまざまな出版物の制作過程で起こっていることとそんなにはちがわないのです。

——人々、特に科学者をウィキペディアに寄稿させている原動力とは何なのでしょう。

いろいろな理由が考えられますが、なかでも大きな理由が2つあると思います。1つは慈善心です。科学者は、その知識を世界中に知らせたいと考えており、それを実践しているというわけです。物事を解明し、それを人々に伝える。完全にグローバル化し、開発途上国にも情報を伝えることを目指すウィキペディアを使えば数多くの読み手に情報を伝え、情報の質を高められるというアイデアが科学者の意欲をかき立てているのです。そしてもう1つはきっと、ウィキペディアには本当にオタク的面白さがある、ということではないでしょうか。 ■